

宮城県の福祉施設に、ウエストポーチを発注（エフコープ）



1月より順次、宅配事業の全職員が着用する予定。

エフコープ（福岡）は、震災復興応援と障がい者雇用促進のため、宅配の職員が使用する「ウエストポーチ」を、宮城県庁および「みやぎセルフ協働受注センター」の仲介により、「指定就労継続支援多機能型あしあと」に発注しました。宮城県庁保健福祉部（障害福祉課社会参加促進班主査）の岡部康伸氏は、「障がい者の自立支援につながる取り組みに感謝します。このような就労支援事業所の製品の活用が、今後、他生協や広く社会全体に広がっていければ」と話していました。

万が一にも備えることができます（コープふくしま）

コープふくしまは、20klのタンクローリーを購入し、ガソリン、軽油、灯油など、すべての油種の取り扱い許可を取得しました。コープふくしま専務理事の野中俊吉さんは、「コープふくしまの所有車ですので、万が一の際、被災地生協に燃料をお届けすることが可能です」と語ります。



コープふくしまのタンクローリー車と児島 剛常務理事。

遠くからも応援しています（コープかごしま）



遠く鹿児島で、岩手の商品を販売。

10月19・20日、コープかごしまの文化鑑賞会『まい・夢』では、いわて生協マリンコープDORA店長の菅原則夫さんが代表を務める復興支援プロジェクト「かけあしの会」の商品を、鹿児島市の「笑顔いっぱいフェスタ」（主催：麦の芽福祉会など）で販売しました。これは、『まい・夢』実行委員が、岩手県を訪問した際に「かけあしの会」と交流を行ない、そのつながりで実現したものです。



「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に入り、見たもの、感じたものを、お伝えしていきます。

大手新聞社や放送局などでつくる「マスコミ倫理懇談会全国協議会」の第56回全国大会が9月26日から3日間、那覇市内で開催された。テーマは「沖縄で問う日本の今とメディアの責務」で、福島と沖縄が抱える課題についての議論が中心だった。私のようなフリー記者は、入ることができないので、協議会が終わった後、出席した知り合いの記者に内容を聞いてみた。それによると、やはり東日本大震災の被災地への関心の度合いに、地域差があるという。震災の記憶や復興への思いの風化を防ぐにはどうするか。そんなことが議論された。まだ発災から2年も経ていないのに、もうそんな話になっている。

ある記者は、「直接の被害のない個人が長期的に興味を持ったり、支援を続けたりすることは難しい。皆さんそれぞれの生活があるし」と明かした。「だから、生協のような大きな組織が継続的に活躍してくれることは心強い。組織的な活動は、これからますます重要になる。生協は『支援する心』を伝え、報道機関はその『事実』を伝える。そういう連携が大切なんじゃないかな」

確かに、何度も生協の支援活動は報じられてきた。これからは、さらにその存在感が求められることになりそうだ。これからもずっとつながっていこう。



秋の福島県にて。